レジャー・レクリエーション研究第75号：31 － 32，2015
Journal of Leisure and Recreation Studies No.75

＜日本レジャー・レクリエーション学会第44回学会大会
シンポジウム　於：立教大学＞

2020東京オリンピック競技大会の展望

星野一朗[1]

Nanjing 2014 Youth Olympic Games Report

Ichiro Hoshino[1]

（1）ユースオリンピックについて

・創設の経緯、目的は？

ユースオリンピック（YOG）は、IOCのジャック・ロゲ前会長の発案により2007年に創設されました。近代オリンピックには、沢山のプラス面がある一方、過度な商業化や勝利至上主義が進んでいます。他方、TVゲームなどの普及は、スポーツに参加する子供の数を減少させていて、今やスポーツ文化の消滅につながりかねない状況にあり、このままではオリンピックの存在意義も消えてしまうことになります。

ロゲ前会長は、こうした危機感を強く持っており、これらのことを背景にして創設されたのがYOGです。若い選手への啓発やオリンピックのあり方を社会に問う意味も持っています。

・オリンピックとの大きな違いは？（競技方式、プログラム面）

YOGでは、オリンピックで行われる多くの競技が採用されていますが、規模と選手数が違います。競技の方式は、団体競技には地域の混合もしくは大陸混合を設けており、国と地域を越えた選手同士の交流が促進されるような種目構成となっています。プログラム面でも、オリンピックと比較してコンソレーションゲームが多く、一度敗戦しても試合数が多くできるように配慮されています。YOGでは夏の大会が選手約3600名、冬が約1000名であり、実際のオリンピックの3分の1程度の人数となっています。南京YOGでは28競技222種目が展開されました。

そして、最も大きく異なるのは、YOGには様々な文化・教育プログラム（CEP）と呼ばれる公式のプログラムがある点です。また、各NOCから推薦されたヤングアンバサダーと呼ばれる18歳から20歳代の男女がIOC側からのファシリテーターとして参加し、CEPなどへのヤングアスリートの交流を促進します。

・CEPについての狙い、参加選手による評価・感想は？

CEPの狙いは、4つのコンセプトである「学び」「貢献」「交流」「称賛」を体験してもらうことにあり、そのためにCEPの5つの教育テーマに基づいたアクションプログラムが10日間の大会期間中に20を超える活動として用意されていました。

CEPの5つの教育テーマとは、1オリンピズム、2能力の開発、3幸福で健康的なライフスタイル作り、4社会的責任、5豊かな自己表現です。

また、各NOCの選手村への滞在は、開会式から閉会式までの全期間滞在が義務付けられているのもオリンピックとは異なっており、この間に様々な仕掛けが用意されていました。

CEPへ参加した選手からの評価は好評で、異文化間の交流が促進されていました。

・YOGは、オリンピックのどんな問題点を浮き

1　第2回ユースオリンピック競技大会（2014/南京）日本代表選手団　総監督
The 2th Youth Olympic Games, Nanjing 2014 JAPANESE DELEGATION Deputy Chef de Mission

彫りにしているか？

YOGは本来のオリンピックのあるべき姿を追求する、実験的な試みであると言えます。例えば勝利至上主義に対する警鐘や、アンチドーピング教育などです。そして、最後までフェアプレーを貫く教育などもあります。ロンドンオリンピックの女子バドミントンでは、故意の負け試合が話題になったことは記憶に新しいところです。

またさらに、YOGは参加したヤングアスリートやスタッフに対して、オリンピック本来の意義である「卓越性」「友情」「尊重」が貫かれているかを問い返す場でもありました。

（2）東京オリンピックに望むこと

・大会がどのようなものになることを期待しているか？

JOCでは「人間力の向上なくして競技力の向上なし」をNF（中央競技団体）に伝え、人間力の向上あっての強化活動であるとしてきました。こうした実践を繰り返す選手たちのひたむきさが、見る者に夢と感動と勇気を与え、メダルにつながるのだと確信します。

文部科学省の調査では、中高生の6割が東京オリンピック・パラリンピックを見たい、と答えています。東京オリンピック・パラリンピックが、見る人だけではなく、参加するすべての人々に夢と感動を与えられる大会にしていければと願っています。

・大会後のレガシーとして期待していることは何か？

本来、スポーツは一定のルールのもとに、地域間格差や人種、宗教といったものを越えた、誰もが平等の中で懸命のプレーをするところに共感や感動を生むものです。50年前の高度成長期の東京大会とは異なり、成熟した社会にあって、スポーツ活動が差別のない社会形成に役立てられるような環境を作り、人類のレガシーとして残していけたら、と考えます。